

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

カルヴィーノとアーティチョーク 31

カルヴィーノの翻訳論

堤 康徳

去年11月、私が所属する上智大学言語教育研究センターのシンポジウムで、翻訳について講演をした。題して「翻訳者：最も読むのが遅い読者」。シンポジウムといっても、じつにこじんまりとした集まりで、聴衆は学生と教職員あわせて20名ほど。私は自分の経験を踏まえ、おもに翻訳にまつわる困難や苦労について一時間ほど話した。事前に配布した宣伝用のチラシに、私はこんなことを書いていた。

「Traduttore, Traditore という有名なイタリア語のことば遊び・警句があります。『翻訳者は裏切り者』という意味です。原文と訳文とのあいだに、埋めがたい深い溝がある事実を示唆した表現です。しかしそもそも、翻訳という経験は、たんに原文を別の言語に置きかえる作業にすぎないのでしょうか？ 翻訳とは、何よりも、深い読書体験なのではないのでしょうか？ 『翻訳者とは最も読むのが遅い読者である』。私はそのように考えたいと思います。翻訳者は、回り道や寄り道で時間をとられ、ときに袋小路に入りこみ、行きつ戻りつしながら、原文という迷路を歩む読者なのです」。

何も高尚な読者論を展開したかったのではない。まさに文字通りの意味である。自分の怠惰な性格によるところが大きいのだが、私には読む作業と訳す作業を同時に進める悪癖がある。一文読むごとに訳すのだ。実際に、ウンベルト・エーコの『バウドリーノ』を訳し終えたときが、私にとっては、500頁以上あるこの長篇小説を初めて読み終えたときだった。読むのに2年ほど費やしたことに

なる。本来ならば訳し始める前に、ひととおり一読するべきだろう。前後の脈絡をつかむためにも、せめて一章、いや一段落くらい全部読んでから、その冒頭の文章を訳し始めるべきだろう。だが、どうにも時間が惜しくて(出版社からはなるべく早く訳すように要請されていたこともあって)、それさえ怠っていた。もっとも、一度訳した文章にはあとで何度も立ち帰ることになり、行きつ戻りつしながら深い迷路を歩むことはまちがいない。エーコの小説を読みつつ訳しながら、私はほかの複数の本も同時に読んでいた。英語版と仏語版、それに時代背景を調べるための歴史書などだ。

ただ、翻訳をひとつの言語から他の言語への変換と捉える前に、ひとつの特殊な読書体験と考えたかったのは事実である。シンポジウムの話の枕に使ったのが、インド系アメリカ人の作家、ジュンパ・ラヒリ(Jhumpa Lahiri, 1967~)がイタリア語で書いたエッセイ『べつの言葉で』(*In altre parole*, Guanda, 2015. 中嶋浩郎訳、新潮社、2015年)である。デビュー作の短篇集『停電の夜に』(*Interpreter of Maladies*, 1999. 小川高義訳、新潮社、2000年)を私は翻訳で読んでとても感心したおぼえがあるが、このエッセイが出版されるまで、まさか彼女がイタリアに関心があり、ましてやエッセイが書けるほどイタリア語に堪能とは思ってもみなかった。ルネサンス建築について勉強する彼女が1994年に妹とフィレンツェを訪れて以来、20年間もイタリア語を勉強しているという。ラヒリは生まれながらにして、ふたつの言語を生き

る宿命にあった。『べつの言葉で』の訳者、中嶋浩郎氏はラヒリの言語的な環境について以下のように書いている。

ベンガル人の両親を持ち、アメリカで育ったラヒリは、家庭内ではベンガル語、家を一歩出ると英語という、二つの言語を使い分けなければならない環境で育った。そしてこの二つの言語は「相容れない敵同士で、どちらも相手のことががまんならないようだった」。イタリア語を勉強したのは、この「母」と「継母」の対立から逃れる手段でもあった(「訳者あとがき」p. 132)。

ふたつの言語にいわば引き裂かれ、宙づりにされた経験をもつ作家が第三の言語で書いた本が『べつの言葉で』なのだ。彼女の書くイタリア語は、何よりもセンテンスが短い。内容もおおむね簡潔だが、ときおりハッとするような文章に出会う。翻訳についても、以下のように興味深い指摘がある。

翻訳することは何かを読む最も内面的な方法だと思う。翻訳は二つの言語、二つの文章、二人の作家のとてもダイナミックで美しい出会いなのだ。分離と再生を必然的に伴っている。以前わたしはラテン語、古代ギリシア語、ベンガル語から翻訳することが好きだった。それは異なる言語に近づき、空間的にも時間的にもわたしからきわめて遠い作者と自分が結び合っていると感じる方法だった(『べつの言葉で』中嶋浩郎訳、pp. 78-79. *In altre parole, op. cit.*, pp. 92-93)。

「翻訳することは何かを読む最も内面的な方法だと思う」(Credo che tradurre sia il modo più profondo, più intimo di leggere qualcosa.) というラヒリの言葉に、翻訳者のひとりとして私も共感をおぼえる。

じつは、わがイタロ・カルヴィーノも、いくつか興味深い翻訳論を書いている。本稿では、「翻訳することは、テキストを読む真の方法である」(*Tradurre è il vero modo di leggere un testo*)

と題された論考を紹介したい。ここでカルヴィーノもまた、翻訳することを読むという行為に関連づけているからである。これは、1982年6月4日にローマで開催された翻訳(とくにイタリア語から英語への翻訳)にかんするシンポジウムでの発表原稿である。内容から想像するに、聴衆には翻訳者や編集者がいたと思われる。

翻訳することはひとつのアートです。ある文学的テキストを、その価値がどんなものであれ、別の言語に移すには、ある種の奇蹟が必要なのです。韻文で書かれた詩が本質的に翻訳不可能であることは私たちみんなが知るところですが、真の文学作品は、散文によるものも含め、あらゆる言語のまさに翻訳不可能なぎりぎりのところで仕事をしています(*ma la vera letteratura, anche quella in prosa, lavora proprio sul margine intraducibile di ogni lingua.*)。文学の翻訳者は、翻訳不可能なものを翻訳するため、己のすべてを賭ける者のことなのです(Italo Calvino, *Saggi* 1945-1985, Tomo, 2, Milano, Mondadori, 2007, pp. 1826-1827)。

あらゆる文学作品は、どの言語で書かれているように、翻訳可能性と不可能性の境界線上にその本質が現れる、そして作家は自らのすべてをそこに賭ける、とも言えるだろうか。

カルヴィーノ自身、フランスの作家レーモン・クノー(1903-76)の『青い花』(*Les Fleurs bleues*, 1965)の翻訳者だった。クノーらが1960年に設立した文学グループ、ウリポ(Oulipo)と、カルヴィーノは交流があった。ウリポは、言語にさまざまな制約を課し(たとえばEの文字をまったく使わずに小説を書いたペレックのように)、数学的な手法を用いて表現の可能性をさぐった文学グループである。

カルヴィーノ訳『青い花』は、1967年 Supercoralli 叢書の一巻として刊行され、その後、*Scrittori tradotti da scrittori*(作家によって翻訳された作家)叢書(全82巻、1983-2000)に入った(*I fiori blu* di Raymond Queneau nella traduzione di Italo Calvino, Torino, Einaudi,

1984)。カフカの『審判』(ブリーモ・レーヴィ訳)、フローベールの『ボヴァリー夫人』(ナタリア・ギンズブルグ訳)、ネルヴァルの『シルヴィ』(ウンベルト・エーコ訳)などがこの叢書に収められている。「訳者あとがき」(Nota del traduttore)によると、『青い花』を読み始めてカルヴィーノはすぐに思ったそうである。言葉遊びに富み、文体も融通無碍のこのような小説は、「翻訳不可能だ」(È intraducibile!)と。

カルヴィーノは何度も、自作の翻訳を読んで、ほんとうにこれが自分の書いたものだろうか、こんな無味乾燥な文を書いたのだろうかと疑問に思うことがあったという。しかも、原文と訳文を比較してみると、それがきわめて忠実な訳なのだという。これはなぜなのか？ それはたとえば、カルヴィーノがある言葉にこめたかすかな皮肉の意味を翻訳が捉えていないときに生じる、原文と訳文の齟齬なのである。さらにカルヴィーノはこう述べている。

こうしたことに私は書いているときはまったく気づいていませんでした。翻訳をとおして自作を読み直してみても初めてわかったのです。翻訳することはテキストを読む真の方法です。このようなことはこれまでも何度も言われてきたと思いますが、私がつけ加えられるのは、作者にとって、自作の翻訳について考察すること、翻訳者と議論することは、自らを読む真の方法だということです、自分が何をどのような理由で書いたかを理解する真の方法なのです(Ibid., p. 1827)。

では、カルヴィーノの考える理想的な翻訳者とは？ カルヴィーノによれば、翻訳者にとって最も大切なのは、lo spirito della lingua、すなわち言語の精神(言語の真髄と訳すべきだろうか)を理解することである。

どんな言語から、またどんな言語へ訳そうと、その言語を知ることだけではなく、言語の真髄、ふたつの言語の真髄と触れ合うことができなければなりません。ふたつの言語がその秘密のエッセンスをいかに伝え合うのかを知らねばな

りません。私の作品は、幸いにも、このような言語の精神を最高度に保有するビル・ウィーバーによって訳されています(Ibid., p. 1828)。

カルヴィーノはまた、翻訳者からの質問に作家が答えるという両者の対話のプロセスを重視しているようである。「疑問をもたない翻訳者はよい翻訳者とはいえません。私は翻訳者の資質について、私にどんな質問をするかによってまず判断します」(Ibid.)とまで述べているのである。翻訳の協働は、作家と翻訳者だけにとどまらない。翻訳者、および、その訳文と原文を子細に比較検討する編集者(editor)との共同作業もまた重要なのである。

カルヴィーノが全幅の信頼を寄せているアメリカ人のイタリア語翻訳者ウィリアム・ウィーバー(William Weaver, 1923-2013)は、カルヴィーノと同じ年の生まれである。ひよつとすると、翻訳にかんするカルヴィーノの本講演に、ウィーバーは出席していたのかもしれない。ウィーバーによるカルヴィーノ作品の翻訳は、『見えない都市』など10冊以上にのぼる。そして私が訳した『バウドリーノ』も、現在翻訳中のズヴェーヴォの『ゼーノの意識』も英語版は彼による翻訳である。私も彼にはたいへんお世話になっている。『バウドリーノ』のときも『ゼーノの意識』のときも、彼の訳本を座右に置いて仕事をしてきたからである。ただ、イタリア文学の英訳や仏訳を読んで思うのは、言語間の近さゆえに、イタリア語の構文をそのまま使うことが可能であり、また共通の語源をもつ言葉も少なくないため、インドヨーロッパ語族に属さない日本語のような言語に訳すときは、あまり参考にならないこともあるのだ。イタリア語から日本語への翻訳には、まさにカルヴィーノの言う「言語の真髄」に触れることがより必要とされるのかもしれない。

(上智大学准教授)

文献学とアンジェロ・マーイ

國司 航佑

ジャコモ・レオパルディ(1798-1837)は、詩人であり、哲学者であり、そして文献学者であった。

こんな風に言うと、文献学って何ですか？という質問が出るかもしれない。文献学はイタリア語では *filologia* と言い、その語源は「言葉／学問を愛すること」を意味する古代ギリシア語 *φιλολογία* にある。

ただし現代では、もう少し意味を限定して用いられる。例えばイタリア語大辞典 *Treccani* の定義では、「言語的・文学的資料(とりわけ古典作品)の再構築およびそれらの正確な理解を目指す学問の総称」となっている。しかしこの説明では、具体的などころはよく分からないだろう。

「文献学」の説明をするとき、筆者はよくロレンツォ・ヴァッラ(1406-1457)という人物を引き合いに出す。ヴァッラはラテン語の教科書をもものしたり、当時一般的に普及していたラテン語訳聖書(ウルガータ)をギリシア語版聖書に照合させて誤りを指摘したりしたことでも有名だが、なにより「コンスタンティヌスの寄進状」が贋作であることを証明したことで知られる。

「コンスタンティヌスの寄進状」というのは、ローマ皇帝コンスタンティヌス 1 世(272-337)が書いたとされていた文書である。その内容は、簡単に言うと、皇帝がローマ教皇シルヴェステル 1 世に洗礼を施されたことにより病から快復し、そのお礼として西ローマの領土を「寄進」するというものであった。

この文書は、ローマ教皇の世俗の権威を担保する資料として 11 世紀ごろから非常に重んじられていたと言われる。ヴァッラはその「寄進状」を文献学的に研究した。つまり、ただ漫然と内容を追うだけではなく、眼前にしている文書がいつ誰によって書かれたかという問題を十分に意識しつつ、

言語的な解析を行ったのである。そして判明したのは、「寄進状」に用いられている言語が 8 世紀頃のラテン語だということであった。したがって、3-4 世紀に生きたコンスタンティヌス帝が書いたはずはない、後代の誰かが書いた贋作である、ということになる。

「寄進状」が偽物と分かれば、ローマ教皇の権威も揺らがざるを得ない。ヴァッラのこうした仕事は、その後エラスムスに受け継がれ、宗教改革へとつながっていく。言葉の研究＝文献学は、ときに歴史を動かす力さえもつのだ。



【ロレンツォ・ヴァッラの肖像画】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Lorenzo_Valla

このように説明してみると、「文献学」は「詩」とは相容れない学問であるように思われるかもしれない。

ところがことイタリアでは、詩人が同時に文献学者である例は非常に多く見られる。その代表格は、なんといっても詩集『カンツォーニエーレ』の作者フランチェスコ・ペトラルカ(1304-1374)であろう。ペトラルカは、現代では俗語(イタリア語)の抒情詩人として知られているが、存命中は、ラテン語詩人として、あるいはラテン語の文献学者として名を馳せていた。ペトラルカは古典作品を大いに愛したが、ただ読むだけでは満足しなかった。

自分の手元にある写本が原典(オリジナルのテキスト)と異なっている可能性を認識し、様々な写本を照合して失われてしまった原典を再構築する、ということを試みたのである。ペトルカのような試みは、近代文学学の最初の一歩だと考えられている。

14世紀にペトルカの手によって開始された文献学は、15、16世紀、いわゆる人文主義・ルネサンスの時代のイタリアにおいて大きな果実をもたらした(前掲のロレンツォ・ヴァツラもその一例)。現代では西洋古典の傑作とされるルクレティウスの『事物の本性について *De rerum natura*』も、この時代に発掘されたものである。

しかし、対抗宗教改革の時代(16-18世紀)になるとイタリア半島内では文献学が下火になり、原典研究の中心地はプロテスタント諸国(ドイツ、オランダ等)に移った。そして19世紀半ば、科学技術の発展の寄与もあり、ドイツに近代文献学が成立する。

レオパルディが活躍したのは、まさにその19世紀である。彼は、1818年に処女詩集(本誌323号2017年10月発行参照)を出版するまでは、作家というより文学愛好家であった。実家の図書室にあった数多の古典作品を耽読し、解説書や翻訳書をもものしたが、詩人として身を立てようとは思っていなかったのである。

しかし、1810年代の後半、ジョルダーニとの出会い(本誌332号2018年7月発行参照)、初恋(本誌337号2018年12月発行参照)、眼病など、彼の人生にとって決定的な一連の事件が起きた。いわゆる「文学的回心」を経てレオパルディは、文学愛好家から詩人に変身を遂げるのである。

さて、レオパルディが自宅の図書室で文学研究に勤んでいた頃、イタリアでは再び文献学が注目されるようになっていた。その主役の座を務めたのが、ミラノのアンブロジアーナ図書館やローマのヴァチカン図書館で働き、後に枢機卿となるアンジェロ・マーイ(1782-1854)である。

マーイは、最新の科学的手法を駆使しつつ、パリンプセスト(羊皮紙を再利用するため、古い文章を消して別の内容を上書きした写本)の下に隠れていた古い文書を浮かび上がらせ、それまで目の見ることがなかった古典作品を数多く掘り

起こした。

1815年に古代ローマの雄弁家フロントの書簡を発見した際、レオパルディが受けた衝撃は並々ならぬものだったらしい。レオパルディは翌年、出版されたばかりのフロントの書簡を翻訳し、注釈と解題を付してマーイに送った。

同年、散逸したと思われていたディオニュシオスの『ローマ古代誌 *Ρωμαικὴ ἀρχαιολογία*』の一部をマーイが発見する。こちらについても、レオパルディはすぐに翻訳と注解を作成した。レオパルディの注解は、マーイの「読み間違い」を指摘するほど精度の高いものだったらしい。レオパルディは文献学の領域においても、決して素人ではなかったのである。



【フランチェスコ・ペトルカの肖像画】

出典元: https://it.wikipedia.org/wiki/Francesco_Petrarca

1819年、マーイがキケローの『国家論 *De re publica*』を発見したことを知ったとき、レオパルディは眼病のため研究に取り掛かることはできなかった。が、代わりに詩を書いてマーイに捧げた。それが、1820年に執筆され、同年に発表された

『アンジェロ・マーイへのカンツォーネ *Canzone ad Angelo Mai*』である(引用に際しては、詩行ごとの翻訳では日本語として成り立たないため、散文のように訳した)。

イタリアの天才よ、なぜ墓場から我々の父祖を呼び起こして止めないのか。(vv. 1-3)

カンツォーネはこのようなマーイへの問いかけから始まる。墓場から父祖を呼び起こすというのは、マーイによる古典作品の発掘を示す比喩表現である。レオパルディが「墓場」という表現を用いたのは、フォスコロの叙事詩『墳墓 *Dei sepolcri*』を意識していたからであろう。現に『アンジェロ・マーイへ』においても、『墳墓』と同じように、イタリアの偉大な先人たちが列挙されている(第5連から第11連)。例えばペトルルカについて、レオパルディは次のように詠ずる。

ああ不幸な恋人よ、お前の甘美な弦は、お前の右手が触れていまだに響いていた。ああ、イタリアの詩歌は苦しみから生まれたのだ。だが、我々を苛める苦悩も、我々を窒息させる倦怠に比べれば、重くもなくつらくもない。(vv. 66-70)

苦悩から詩が生まれるという表現は、レオパルディの詩学を象徴するものである。また、現代の倦怠を嘆くさまは、ボードレールの詩を先取りしたものと言えなくもない。だがここで筆者にとってより興味深いのは、ペトルルカがラテン語学者としてではなくイタリア詩の生みの親として描かれていることである。

実のところ、『アンジェロ・マーイへ』において列挙されている先人は、みな中世以降のイタリア人である(ダンテ、ペトルルカ、コロンブス、アリオスト、タッソ、アルフィエーリ)。つまりこの詩の中心部は、マーイの仕事とまったく関係がないものなのだ!

当時のレオパルディは、文献学者としては古典の世界の中に深く入り込みながらも、詩人としてはあくまでイタリア文学の系譜にのうちに自らを置こうとしていた、ということなのだろうか。

[参考文献]

Giacomo Leopardi, *Canti*, Milano, Rizzoli, 1981.

Sebastiano Timpanaro, *La filologia di Giacomo Leopardi*, Bari, Laterza, 1997.

Antonio Carrannante, *MAI Angelo*, in *Dizionario Biografico degli Italiani*, Volume 67 (2006),

([http://www.treccani.it/enciclopedia/angelo-mai_\(Dizionario-Biografico\)](http://www.treccani.it/enciclopedia/angelo-mai_(Dizionario-Biografico)))



【アンジェロ・マーイの肖像画】

出典元: https://en.wikipedia.org/wiki/Angelo_Mai

(京都外国語大学講師)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>